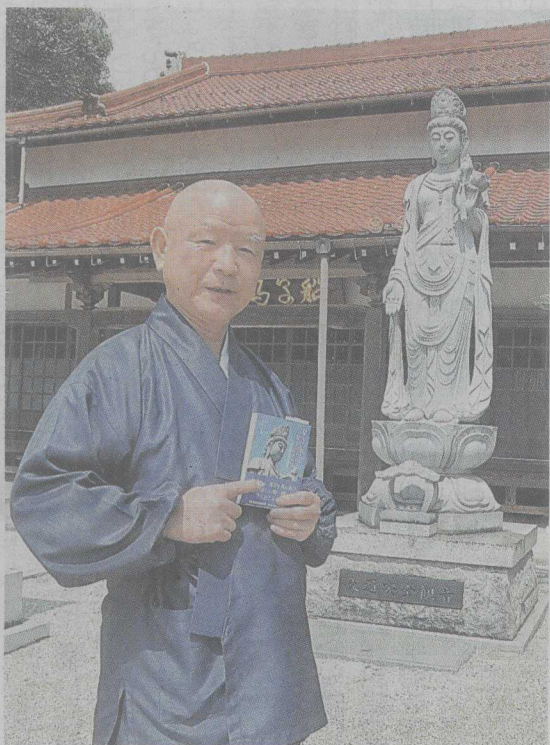


対向車の飲酒運転による交通事故で20歳の娘を1999年に亡くした出雲市斐川町神水の仁照寺住職、江角弘道さん(72)が、教についてつづった一冊。5月文庫本「見えるいのちと見えないいのち」理系和尚の求道記(「文芸社」)を自費出版した。理学博士でもある江角さんが、

一元論の視点から命考察

交通事故で娘を亡くす 江角さん(雲)自費出版



自費出版した「見えるいのちと見えないいのち」を手にする江角弘道さん。出雲市斐川町神水、仁照寺

た。

著書では、娘を亡くした際に「なぜ、娘は亡くなったのか。どこへ行ったのか」を思い続ける中で、亡くなった人は全て仏であり、人を導いてくれる「善知識」であることに気付いた経緯などを記した。

学生時代から追究する物理学が、力や熱、電磁波など見えないエネルギーを証明する学問で、「命」を明らかにする仏教に類似すると指摘し、「すべてのものは一つ」とする一元論の視点も、仏教や命の理解に役立つことを説いた。

悲しみを癒やす方法として、金子みすずの詩「こだまではようか」を引用し、「悲しみを共有する」ことも紹介。江角さんは「存在を丸ごと受け入れて返す『こだま』をし合うことで救われることを知ってほしい」と話した。

「見える」(146ページ)は648円。インターネット注文や書店での取り寄せで購入できる。(岡田素衣)